

## エッセイ

### 色葉句へど【2】

#### 歴ぬに想う事

#### ゲンさんの幻想

宮下 元

#### ♡令和とは終戦♡

新元号が決まった。『令和』（れいわ）とのこと。『令』の漢字が堅苦しいが、古代日本史、特に万葉集が大好きな私としては、嬉しいことだ。

古来、暦（こよみ）や時刻の管理は権力の象徴であり、元号の命名は権力者の特権である。ただ、『安』の字が安易に採用されてなくて安堵している。

#### ▽万葉集は暗号書△

万葉集は、世界に誇れる詩歌集だ。日本語の原点でもある。

おそらく咎人（罪人）の柿本人麻呂が1・2巻原案を書き、大伴旅人・家持親子と山上憶良が集大成。悲しみの歌（挽歌・政権批判）や庶民の和歌までをまとめたもの。人麻呂は後世に『歌聖』とされた。語学オールマイティの天才歌人だ。私は、真実（人麻呂の恨み）を隠し込んだ暗号書と想っている。焚書されずに、現代まで残ったのは奇跡かもしれない。

暗号書なので、内容は素直に読んではいけない。時期・場所・人物名・意味などは裏読みが必要だ。

#### ▽引用は漢文で漢詩から△

巻五の中の32首の前の序文か

らで、『初春令月氣淑風和梅披鏡前之粉・・・』からとのこと。730年（1290年前）に奈良の都から遠く離れた九州太宰府で、大伴旅人主権の梅の花見の宴。当時の花見は桜でなく梅花。当時、梅は舶来の珍しい花だ。中国古典の落梅の漢詩を真似て、和歌を詠んだ。だから、『令月』の原案は中国の漢詩からだ

序文の作者は不明だが、私は漢文も得意の憶良と推測している。憶良は山上憶良（憶ではなく）として中国留学しており、人麻呂の同志・部下ではなかるうか？

当エッセイのタイトル『色葉』と同様に、栄枯盛衰（落花）の意を裏に込めて詠んだと思われる。

意味は、『初春（正月）の令月（立派な良い月、十三夜のほぼ満月）、気（空気・大気）は淑く（よく、美しい）、風は和ぎ（やわらぎ・なごやか）、梅は鏡の前の粉（こ・白い花びら）をひらく（披露する）・・・』

なお、万葉集の和歌は『万葉かな』だが、この序文などは漢文で書かれている。

#### ▽意味は『立派な終戦』△

漢字（甲骨文字）の研究の第一人者は、中国学者ではなく、なんと日本人の、故、白川静氏だ。私は、いつも基本的に、文字や漢字の由来、本来の意味を確認している。今一番愛用しているのは氏の『常用字解』である。

それによれば、『令』は象形文字。笠をかぶりひざまづいて神に祈る人の姿。そこから、『神のお告げ・みことのみり・命令』となる。そして、『良い・立派・高貴』の意味に変化。『御令室・令嬢』などだ。

『和』は、軍門の前で誓いを交わし和すること。戦いが終わること。『禾（か）』は軍門の前に立てた木製の看板。ただ、通常『禾（のぎへん）』は稲を頭すが、ここでは『軍門』を頭す。

『口』は祈りの祝詞（のりと）を入れた器の方。顔のクチではない。【参考：常用字解より 白川静 著】

#### ▽争いの無い世界を望む△

菅官房長官の掲げた毛筆を見たら、凜とした力強い達筆だ。私なら、『和』の字は丸みを持たせ和らぎを表現したいところだ。ともかくも、神に祈って、戦いを

止めるようにみことのを出して  
もらいたいものだ。安寧が一番だ。

篇なら『鈴』（音が立派）、

『卜』（心篇・りっしんべん）なら  
さとい・利口となる。

二スイ（氷篇）なら『冷たい』、

ただ、雨冠なら『零』。本来は神  
に祈って静かな雨が降ること、わ  
ずかなこと。中国に数字の0（ゼ  
ロ）が伝わった時、発音の似てい  
た零が当てられたという。

▽補足：文字は変化する△

漢字や文字はどんどん変化す  
る。書体も様々。『令』の下部は『了』  
とも『マ』とも書く。どちらでも  
構わない。篇で意味も変わる。

『王』（玉）篇なら『美しい珠』、『金』

~~~~~